

AV JOURNAL

1985年3月 第7号



〈デジジョンルームにて〉

目次

“外大生の外国語学習について”

外国人教師による座談会.....	2
カイロ大日本語学科とAV機器.....	高階 美行... 7
テキサス大学のペルシア語教育.....	香川 優子... 9
視聴覚教育施設平面図・概要.....	11
テープライブラリー、LL自習室利用状況統計表 (1984年4月~1985年2月).....	13
編集後記.....	16

大阪外国語大学

“外大生の外国語学習について”

外国人教師による座談会 (1985年2月7日)

出席者

宿 玉 堂 (中国語)	視聴覚教育委員会委員
マーラヴィア, ラクスミ・ダル(ヒンディ語)	乙 政 潤 (ドイツ語)
タバッスム, カシミーリー・ムハンマド・	杉 本 孝 司 (英 語)
サールヒーン (ウルドウ語)	郡 史 郎(イタリア語)
ネルソン, ウイリアム・ロバート (英語)	上 神 忠 彦 (中国語)
ゼルトマン, ヴォルフガング (ドイツ語)	松 村 耕 光(ウルドウ語)
イプセン, アンネ・メッテ(デンマーク語)	斉 藤 隆 文 (英 語)
ルイテン, ソニア・マリア・ビンベ (ポルトガル語)	

下に記事となっている座談会は、視聴覚教育委員会が昭和59年度の事業の一環として開催したものである。

テーマは委員会が用意したが、開催の主旨はあくまでも、外国人客員教授の方々に平素の授業体験にもとずいて本学学生の外国語学習について卒直な御意見を述べて頂くことにあった。各先生方の御発言がきっかけとなって、学内で同じようなテーマについての話し合いが盛んになれば、委員会としては喜ばしい限りである。

なお、開催の連絡が不行届きであったため御迷惑をおかけした先生方には深くお詫びするとともに、次回にはぜひ御出席頂けるよう今からお願い申し上げる次第である。

乙 政 本日の主テーマは「外大生の外国語学習について」ですが、これを次の6つの小テーマに分けたいと考えています。

- 1) 外大生を教えていて楽しいですか。
- 2) お国の学生とどこが違いますか。
- 3) 何に弱く、何に強いですか。
- 4) 先生は何を伸ばしたいと考えて授業をしておられますか。
- 5) LLはどのように発展させていけばいいでしょうか。
- 6) 最後にそれぞれ外大生への忠告、助言がありましたら一言ずつお願いします。

それでは第1テーマから御発言をいただきたいと思います。

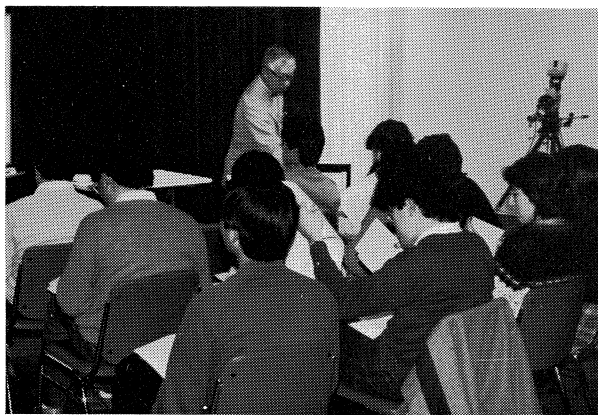
ネルソン もちろん教えていて楽しいです。学生のレベルが高くいろいろ考えを交換したりできますし。

マーラヴィア もちろん楽しいですけども、普通の

授業とLLの授業は区別する必要があります。実のところ私は機械に反対なのです。特にLL教室の20人というのは大きすぎる。1年生を2グループ10人ずつに分けても一人に当たるのは5分から7分だけ、一人の発音をチェックしている間は他の学生のことはわからない。以前のように教室での授業なら、代表を選んで皆にそれに合わせて発音させるようにすると、間違った人はすぐチェックできる。ところがいまは一人に充分時間を与えてやれない。

ルイテン 一年目ですけど楽しんで教えています。ブラジルと違って恥ずかしがり屋の学生が多いのですが、だんだん慣れてきて、学生を知っていく興味も出てきました。自分について自分の意見を書いて貰ったりして、いろいろ話し合えて楽しいです。ついでに3番目のテーマに関して

例えば、発音は直してきたので、いまはよくなって問題はなくなってきたと思います。LLについては経験がなく、よく分かりません。ただ、来期は使用する予定でちゃんと用意をし、テープも準備したし、テストもするつもりです。きょうこういう会を初めて開いていただいて、皆さんと意見や問題点を話し合うことができるのはいいことだと思います。他の先生がどのようなやり方をなさっているのかわかりませんので、こういう機会に学んで、よりよい教育をしたいと思います。今後もこういう機会を作っていただきたい。



セルトマン 本学も含めて30年間教え続けていますが、ここでも楽しんでます。もちろんこの国での教育と、自国での教育の状況が違うのははっきりしています。早く外大での状況に慣れ、学生の考えを知るようにも努力していますし、学生も私のことを好きになって欲しいと思っています。共通テーマとしての音楽・美術・文学などを通じてドイツ語を一生懸命学んで欲しい。学生達の態度についていうと、教科書を学ぶときに一人一人、ばらばらであり過ぎるように思います。クラスによっては35人と多く、しかもドイツ語の初心者の場合、授業の導入に困難を覚えます。また1クラス25人は多すぎて、教えるのに大変な努力がいります。学生には恥ずかしがらずに積極的に反応してくれるように激励してはいますけれども。それからこちらの学生と私では時間を守るということについての考え方があまりに違い過ぎます。遅れてきて授業を乱すのにはやっとなれてきました(笑)。

マーラヴィア 全くその通りです。

セルトマン 遠くから来ているとか、目覚し時計が鳴らなかったとか、いろいろ理由はあるでしょうが、授業を乱されるのはかたがたありません。先に失礼しなければいけないので、他のテーマについても語らせていただきました。

乙 政 それではこのへんでテーマをうつしていくことにしましょう。

宿 中国では外国語の教育の場合、話すこと、聞くことに重点を置きます。ところが日本では読むことに重点がおかれています。これは特に中国語を学ぶ場合に顕著に現われているのですが、日本とは同文字である漢字を通じて学習するために、特に教師が詳しく説明しなくても意味が理解できていく。そのことが逆に聞くこと、話すことを重視しないことにつながっているのではないのでしょうか。中国では2年間の外国語教育で相当しゃべり聞けるようになりますが、日本の場合、2年間ではたいした収穫を得ていないようです。これも先ほどの漢字という材料の性格から来るものだと思いますけれども。

イブセン 宿先生の言われた、日本での外国語教育が読むこと書くことに重点が置かれているということに同感です。私は会話に力を入れたいのですが、他の授業はそうでもないようです。私は授業の外でも習っている言葉を使えるようにしたいと思っています。これは日本の先生もです。私の小さい時には、英語の先生はクラスの外でも英語も話していました。

マーラヴィア インド、パキスタンでも同じです。英語の先生は、英語しか使わない。

イブセン デンマークと日本の学生の違いですが、日本の学生は恥ずかしがり屋が多く、授

業では私をこわがらず、恥しがらずにしゃべるようにと言っています。教える体制にも問題があるのでしょうか、予習はよくするのですけれども、自分なりの批判精神が不足しているように思いますので、是非これを身につけて欲しい。教え方にももっと議論があってもいいと思っています。

タバッスム 第2、第3のテーマをまとめて発言します。本学で教えて3年目ですが楽しく授業をしています。よい学生が多く、勉強しているし宿題もちゃんとやってくる。ただ困ることは、私が話している時、雑談したり、眠っている人がいることです(笑)。夜勉強して眠いかもしれないけど、勉強するという意欲に欠けているように思う。日本の状況では、卒業したら皆ちゃんと仕事につけるのでこうなるのでしょうか。4年生になったら出てこない学生もいます。それから先程も出ましたけれども、学生に批判精神というものが欠けています。学問のどういう分野を勉強するにしてもなくてははいけないものなのに、問題です。もうひとつ困るのは、3年、4年になっても正しく書けない話せないということです。学生たちはこのことをよく考えなければなりません。他の学科ではこういうことはないのでしょうか。

マーラヴィア 今タバッスム先生のお話にも出ましたが、4年間、外国の言葉をやって、先生が一生懸命教えているのに、どうして4年生でもちゃんとしゃべれない、書けない、読めない場合が多いのでしょうか。原因は何でしょう。少し皮肉ですけれど、私は時々この学校は外国語<外>大学だと言うんです(笑)。学生たちの弱い所は、学生たちの責任じゃないと思います。さっきもどなたかおっしゃいましたが、それはこの学校での外国語の教え方にあるんじゃないでしょうか。ここでは、文法と発音と読むこと、だいたいそれだけです。中学、高校と同じじゃないですか。だから、ここは大学ではなくて<大>高等学

校といえいいんじゃないでしょうか。きつい言い方ですが、文法というのは、言葉のくみとり屋です。きたないものをとっていか(笑)、なおすとかそれだけでしょ。辞書というのは言葉そのものじゃありません。文章の中にある言葉を使わないで、辞書の中の言葉だけ使うならこれは言葉のお墓です。最初から生きた言葉、文章を導入すべきじゃないでしょうか。もちろん文法も少しは教えなければなりません。同じことですが、発音も、日本人の英語の発音、ヒンディー語、ポルトガル語の発音、これをインド人やアメリカ人、イギリス人の英語の発音のように何十年も教え続けてはならないのです。小さい時から正しい発音を教えないと発音は直りません。どこまで発音と文法をやるか。どこから<言葉>を使うか。言葉は生きていますから、学生が出来ないとしてもそれは学生達のせいじゃないと思います。最後にもう一つ言いたいのですが、私も昔からタバッスム先生と同じような見方をしています。一年の時には深い興味を持ってくるんです。2年でその興味が少なくなり、3年生でダラーンとなって、4年生では全然耳に入らない。これにも原因はあります。4年間ヒンディー語をやっても、そのあとインド関係の仕事はないことがはっきりわかります。デンマーク語をやってもアラビア語をやってもだいたい同じです。英語もそうじゃないでしょうか。子供じゃなく大人ですからもうはっきりみています。外国語を学ぶことと仕事の間接関係がつかないということを。でも私は、学生達のこうした考え方に賛成ではありません。言葉というものは、文化、文学と広い意味をもっているものですから、学生達に、言葉、言葉、文法、文法、発音、発音、そればかり教えるのじゃなくて、ちゃんと国、その国民、その文化の方に目を向けさせたらそれが治るんじゃないかと、そう思うのです。

ゼルトマン はじめこちらに来た時には、University of Foreign Studies という英語の大学名しか知らなかったの、いろんな分野を言語を含めて研究する大学だと思っていました。しかし1ヵ月もすると、言語を中心とした大学であって、学生がそんなに高い程度の教養をつけるための大学ではないということがわかりました。今、学生が言語の知識を身につけた後何をするかがわかっていないし、教師の側も学生が言語の知識を身につけた後何をするかがわかっていないという問題が出ました。すなわち学生は将来の職業を何にするかわからないし、先生になるか言語学者になるかわからないし、他の分野に行くかもしれない。そこで何を目標にするかということに関して非常に問題があります。これは大学のせいではありませんが、しかし何とかしなければならないと思います。今すぐは解決できないと思いますが、将来解決する方向に進む必要があると思います。

乙 政 4番目のテーマでネルソン先生に御意見を聞きたいのですが。

ネルソン 私が学生に教えるのは会話、まあ話す能力なんです、これと並行して他の事柄たとえば工学とか地理とか、いろんな他のトピックも学んで欲しいと考えて授業をしています。

私は学生がなかなか喋らないという問題を解決するために、故意に学生が反対をするであろうような意見を述べて、学生が喋らざるをえない状況を作って授業をしています。こんな風にして学生に論理力をつけさせ、批判精神を伸ばしてもらうように考えています。

イブセン ゼルトマン先生がおっしゃった様なことはありますが、言語を学ぶと同時に批判精神を養って欲しいと思います。

マラヴィア 中国ではどうですか？ 中国では日本語を学んだ後それを使えるようになっていきますか。それとも日本語を学んだ後、日本語とは全然関係の無い所で働いてい

るのですか。

宿 中国の外国語を勉強する大学生は、卒業したら100%その仕事につきます。日本語でも英語でも必ずそういう関係の仕事をしします。中国では外国語を学ぶ学生が足りない位です。外国語がわかる人は少ないので卒業したら政府関係のようないろいろい仕事があります。

マラヴィア インドでは日本語を教えているのは一ヵ所だけだと思いますが、そこを卒業した人達の8割位かな、みんな日本関係の会社・仕事につきます。人数はすごく少ないですけど、学生達はその目的で入学するんです。日本では無駄が多いのではないですか？ 大変失礼な言い方なので、ひょっとしたら私達はクビになってしまうかもしれませんが、外国語大学というと、東京外国語大学、大阪外大、京都外大あっちこっちにあります、そんなに要りますか？ 時々思うんです。

乙 政 5番目のテーマに移っていいでしょうか？ イブセン先生、どうぞ。

イブセン LL教室の事務の方達は大変良い人が多いので助かりました。去年LLの授業を始める時はどうしたらいいのかわかってしまいました。私ははじめのうちはLLを使っていたのですが段々使わなくなりました。その理由は、機械を使ってただ聞いたり喋ったりする時間よりも、コミュニケーションを深める、つまりお互いに話し合う積極的な時間が欲しかったか



らです。LLというのは確かに良い点はあるんですが、しかし外国人の先生と実際に対面して話す時間も非常に大切だと思います。去年も今年もLLを使いましたが、最初の10分間だけ使ってそれから本来の対面授業に入るようにしていました。ところが今年使った教室のブースがボックス型になっていましたので10分間の授業ができませんでした。

私はテープを使って普通の教室でやっているんですがその理由は、私の声だけじゃなくテープの声、他の人の声も理解できるようになるためです。ここのLLは非常に良いので、個人で練習すると大変役立つと思います。

乙 政 イブセン先生、具体的な使い方何か忠告して下さることはありませんか？

イブセン 義務的なクラスを作って、教師なしで自主的にLLを使って練習するようなクラスがあってもいいと思います。私の場合、クラスの人数が少ないのでLLを使わなくてもやっていけます。

それから物理的な問題もあります。ある教室ではブースがボックス式なので生徒の顔が見えないのが私は困ります。

ネルソン LLに関してはイブセン先生と同じような考えを持っています。LLは図書館のように使えばいいと思います。どの学生が行ってもいいわけです。それを義務的にして1週間に何度か行かせればいいと思うのです。そこには先生がいなくても、LLの方かだれかがいればいいでしょう。学生は先生とクラス名を告げて使うということにすればいいのです。ただ、教師は先に教材を用意しておく必要があります。

一番肝心なことは、テープを使うことによって貴重な時間が無駄になってしまうということです。外国人教師であればナマの英語が聞けるわけですから、ナマの英語を聞ける機会が無駄になっていくということは大変問題があると思います。4年間で学生がどれ位の時間ナマの英語

を聞くのかというと、トータルでたったの8日間です。4年間で8日間というのは非常に問題があると思います。

乙 政 図書館方式でテープを使いますと、学生は自分の誤りを直してもらう機会がないと思うんですが。

ネルソン 発音の誤りは授業中に直せるので問題はないと思います。私が考えているLLの良い点というのは、発音するよりも聞くこと、とにかく聞くことだと思います。2ヵ月間一生懸命聞く練習をした人は非常に発音が改善されます。結局LLというものは喋る機会じゃなく聞く機会にすればいいと思います。話す機会は教室で先生と対面する時に持てるんですから。LLで勉強すると、同時に自分の声も聞くことができるので、非常に満足いくほどではありませんが、少なくとも自分の声が聞けて間違いに気づく可能性があります。

乙 政 最後に皆様から、学生のために御忠告を伺いたいと思います。

宿 学生に対して要望というのか希望というのか、2、3申し上げたいと思います。まず中国語を本当の外国語として勉強して欲しいということです。これにはいろいろな意味を含めていますが、その一つは漢字に頼らないこと。よく学生が漢字に頼って本を読んだりしますので、そういうことがないように、ということです。第二には、中国語を話す時にもっと大きな口をあけて、恥ずかしがらずに喋って欲しいということです。第三には中国語の原文、つまりもともと中国で、中国語で書かれた原文に数多く接して欲しい、最近よく出廻っている、日本語化された中国語ではなくて原文に多く接して欲しいということです。

マ-ラヴィア 日本人の性格なんでしょうが、恥ずかしがりながら喋るのではなく、堂々と、私のように沢山間違いをしても平気で喋ることです。それから、外国語を学んでいることの目的をハッキリさせないと、

あやふやになってしまうということです。

イブセン 先生の方にも問題があると私は思います。生徒は熱心なのですから、先生の側が予習をちゃんとやっているかと、どういう方式を使って教えているかとか、先生の方が考える必要があると思います。こういう座談会が又あれば問題点を話し合ったり、具体的な授業のやり方を示し合ったら非常に役に立つと思います。

マーラヴィア お互いのクラスに行ってみるといっははどうでしょう。私のクラスにも来てみて下さい。

イブセン 生徒に問題点を指摘してもらえば先生の方の授業の仕方も改善できると思います。クラスの雰囲気がよくないときは学生の方もその雰囲気の悪さを感じているので、問題点を指摘してもらうことは大切です。

ネルソン 私もイブセン先生と同じ意見を持っていて、毎回学生からの評価や希望、批判を聞きますが、これが非常に役に立

っています。学生にアドバイスを与えるよりも、教師が自分自身のことを考えてみるようにと思っています。学生も一人の人間なのだから、学生の持っている意見や考えに教師の側がもっと興味をもった方がいい授業ができると思います。学生をよくするためには教師の側もよくなる必要があって、そのためにはまず、語科内のコミュニケーションを専攻学科の言葉で図ることが大切だと思います。日本語を使ってある外国語を教えることの有効性には疑問があります。しかし、はじめから日本語を全然使わないというのは問題ですから、上級学年に進むに従って使用を減らしていき、3、4年では専攻語だけということにすれば、良い学生ができると思います。

乙 政 時間が来ました。これで終わりたいと思いますが、お忙しいなか親切な御発言ありがとうございました。

カイロ大日本語学科とAV機器

アラビア語学科 高階美行

とにかく暑いカイロに赴任したのが1982年9月末のこと。この暑さにも徐々に慣れて学生達とのコミュニケーションも何とかうまく行き始めた頃、「先生、テレビを見ましょう。」と学生がしきりに言う。「テレビ？」そうだ、ここにはAV機器があったのだ。

カイロ大学は、政治・経済のみならず、文化・学問において中東アラブ諸国の中心たるエジプトの最高最大の大学である。歴史の長さは、アズハル・モスクを母体とするアズハル大学に譲るとしても、レベル・規模はエジプトのトップである。そのカイロ大に油乞い外交の申し子として、日本語・日本文学科が設立されたのは1974年9月（自由講座としては同年3月より）のことだった。様々の成果をあげながらも、その運営が軌道に乗るには種々の紆余曲折

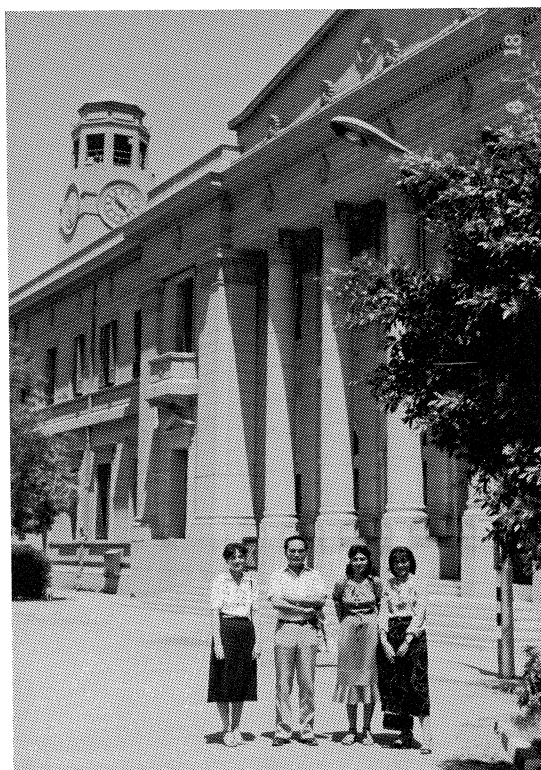
があったとのことであるが、1980年、日本語教育への大きな刺激かつ梃入れとして、国際交流基金とソニーによりオーディオ・ビジュアル装置一式が寄贈された。カラー・テレビ付ブース8台、全リモコンマスターコンソール、大スクリーン（2m×2m位）投写式ビデオコーダー、及び付属機器類である。

寄贈する日本側の意図とは逆に、この装置はその後様々な問題に直面せざるを得なかった。まず、どこに設置するか。名にし負う超マンモス大学（年末試験の時期には学生を収容しきれずキャンパス内の空地に大テントを張りまくる光景の凄まじさ！）のどこに、それだけの余裕があるのか。更には、誰がどのように維持管理するのか。我々の感覚では、その目的のため寄贈された日本語学科の教官が管理する

のが当然と思えるのだが、カイロ大の発想は異った。これだけの近代的教育機材——カイロ大に唯一、従ってエジプト唯一、従ってアラブ唯一、従ってアフリカ唯一——が、今エジプトのものとなった。当然エジプト人が管理せねばならないし、エジプト人にはその能力があるのだ。では一体誰が？ そういう機械を扱うのは専門的エンジニアに決っている。こうしてやっと設置された所は、日本語学科のある文学部別館から遠く離れた大学本部大講堂地下であり、取扱責任も本部職員たるエンジニアである。日本人教官には、鍵を持つ自由も無かった。

こうした経緯が、その後の活用を大きく制限したのは言うまでもない。本部大講堂入口には厳しい警備兵がいて、客員教官でも容易に入れない。身分証を呈示してやっと入ると、目的は何か、荷物はここに置いておけなどと呼び止められる。負けてはならじと学生と一緒に大声でやり合った後、やっと係の者がエンジニア氏を呼びに行く。ここまではその労を厭うことさえなければ、いつでも突破できる。その後は神のおぼしめし次第。エンジニア氏がない、この一言で予定の授業はつぶれてしまう。学生と共に探し回った挙句やっとシャーイを飲みつつ話しにふけているエンジニア氏を発見した頃には120分授業の半分以上は過ぎてしまっている。運良く、さほどもせず見つかったとしよう。少しひんやりした地下の一室（夏の高温と異常に多いほこりの侵入を防ぐ意味もある）に入り、今日は何を見ようとふと考えこむ。ビデオ・リストで前もって選んでおいても、内容と学生のレベルの不一致と残り時間がいくらあるかによって、つい考え直さざるを得なくなる。53巻（69本）あるテープは「日本の料理天ぷら」「伝統の味お正月料理」から「座頭市地獄旅」に至るまで、すべて日本語オンリー、英語スーパーもない。仕方ない、百聞は一見にしかず、何でも見せるが勝だと無理に見せたところで、しばらくすれば判らなくなって騒ぎ出す。15分位ずつ区切ってアラビア語で説明をはさむとすれば、60分テープでもロスした時間のせいで、最後まで十分見られない。事情は3本ある英語のテープでも同じ。どうしようも無い時は、絵を見て判れ、と命令することにもなる始末。

これだけならいい。一学年15人の学生に8ブースで足りないことも、さておくことにしよう。だが、



そのブースに椅子が無い！ 八方塞がりになって、スクリーン投写式ビデオの前に集まり、二つあるソファーに教官と女子が座り、他は座った学生の膝か床の上に直接腰を下ろして見るのである。

その後1984年完成した新館地下に、約束通り移動され、条件も改善されただろうと希望する。しかし、カイロ大でのAV機器利用の授業風景の写真を、と要望されたのであるが、こうした現状では写真をとることすら思いつかなかったし、写真のためだけに入室するなんてましてや考えも及ばなかったのが実情である。
(’85年3月12日)

テキサス大学のペルシア語教育

ペルシア語学科 香川 優子

1. UTの教育システム

テキサス大学オースティン校(UTと略す)は、テキサス州の州都の中心部に位置する全米屈指のマンモス大学である。ここの人文科学部にDOALL (Department of Oriental and African Languages and Literatures)があり、そのPersian Sectionが外大におけるペルシア語学科にあたる。専攻の授業は学期平均6コースで、外大での前期にあたるlower divisionで語学と文化入門、後期にあたるupper divisionで文学、文化関係の授業がもたれるのが普通である。

例えば、今年度のカリキュラムは次の通りである。

秋 学	前期	初級ペルシア語 I 中級ペルシア語 I 中東入門 I
	後期	イランの文化的伝統 現代ペルシア語散文学 アフマド・キャスラヴィーの人生と思想
春 学	前期	初級ペルシア語 II 中級ペルシア語 II 中東入門 II
	後期	フォールグ・ファッロフザードの詩 中東の言語と社会 現代イランの知識人展望

ただし、別に複数学科で構成される CMES (Center for Middle Eastern Studies) があり、DOALLはこのセンターを通じて歴史、政治、地理、人類等の学科と講座を共有している。これに対し、DOALLは主として各学科の言語教育に協力するという、相互依存の関係なのである(ちなみに、この協力関係によって、学生の選択肢は学期毎に少なくとも17増すことになる)。

UTの学部生は一般に、卒業までに計120単位を、A(英語、作文、外国語)、B(社会科学)、C(自然科学)、D(一般文化)の4分野から取得することが義務づけられている。教養学部にあたるものはないか

ら、学生は専攻の如何を問わず、この必要単位を満たすために様々な学部の授業に参加するのである。外国語については、全学生に中級までの修得が要求されている。専攻の必修単位は学科毎に異なる。DOALLの学生は、専攻語から18単位、他の専攻関係の講義やセミナーから12単位以上取得することになっている。

2. ペルシア語教育の現状

一般的な説明はこの程度に留めて、ペルシア語教育の現場を覗いてみよう。

初級ペルシア語には、現在約12名の学生が参加しているが、DOALLに所属している者はいない。国籍別には、外国育ちのイラン人3名、レバノン人1名、残りはアメリカ人である。イラン人を除く学生たちの履修理由は、全員が配偶者(あるいはそれに相当する者)がイラン人である、という一言に尽きる。つまり、彼らにとってペルシア語は非常に身近で、必須の言語なのであり、外国語の必修単位数にはいるとなれば、まさに一石二鳥といえる。自然、授業にも熱がはいる、質問も活発に飛んでいる。ただし、彼らの興味の範囲は基本的な読み書きを超えないので、彼らが後期の授業に参加することはまずない。(また、登録者が「途中退場」する事も多く、20人程度いたのが学年末には数人になっているケースも少なくないと聞いた。)

このような現状に應ずる意味もあってか、初級のテキストは、教授手作りの日常会話中心のものである。文法的説明は、学生にテキストから問題点を拾い上げさせて討論する以外は最少限にとどめ、秋学期は殆ど会話のみ、春学期に至って散文や現代詩も取り上げられて、学生に口語と文語の相違を認識させる。授業は、テキストの朗読、翻訳、会話のパート練習、時に作文等で構成されている。

週4日の授業のうち、1日をイラン人のTA(Teaching Assistant)に任せ、その日は教室内ではペルシア語のみを用いる約束で、テキストの復習や応用

会話を行なう。また、しばしばイラン映画のビデオテープも教材に利用されている。

中級に至ると、学生は普通2、3人になるが、それとて初級の授業を経てきた者とは限らない。例えば現在2名いる学生のうち、専攻の心理学を学ぶうちにスーフイズムに興味を持ったという学生は、初級から始めたが、軍関係でペルシア語を必要とするという、もうひとり、初級程度の知識有り認められての飛び級である。この2名に対し、興味の対象が余りに異なるということで、現在個別に週2回の授業がもたれている。うち1回は指導教授と神秘主義詩や政治史等、各々の選んだテキストを読み、もう1回はTAとの復習、質問にあてられる。

ただし、現在は2人いるペルシア語教授のひとりが入院中、TAも変わったばかりという変則状況で、昨年度までは、G.L.Windfuhr & S.Bostanbakhsh, Modern Persian: Intermediate Level, Univ. of Michigan, 1980.を用いた授業が行なわれていたらしい。このテキストは、会話、読み物、及び必要な文法事項の解説によって1課が構成されているものである。

次に、後期の講義やセミナーに目を投じると、今度は一転して学生の殆どがイラン人で埋められる。多かれ少なかれ外国で育ち、専攻としても石油化学やコンピューター科学を選ぶ事が多い彼らにとって、これらの授業は上記の分野Dの必要単位を得るのに便利な存在なのである。また、彼らのアイデンティティ模索にも役立っていると言えようか。このほか、アメリカ人学生も若干参加しているが、教材には英訳のあるものを選んで用いることもあり、前期のペルシア語教育の成果をここで見ることは稀である。

以上の様な学科の不活発、学生の「断層」は、おそらく革命後のイラン・米関係の決定的悪化によって、とくに顕著になったと思われる。見事なまでの学生の実利主義は、DOALLの中では、ペルシア語の不人気を尻目に、アラビア語や日本語に学生が殺到

するという傾向を生んでいる。また、UTの長所でもある学部、学科の壁の開放、柔軟性のあるカリキュラムも、ここではこの「断層」を深めこそすれ、妨げはしないであろう。

3. 視聴覚教材

ペルシア語教育の実情は、少し寂しいものであるが、視聴覚教材には見るべきものがあるので、最後にそれについて述べたい。

まずテープ教材については、初級19種、中級7種、上級8種のペルシア語独習用テープがあり、そのほかに若干の詩や音楽のテープも揃っている。これらのうち半数以上は、各年度のテキストに合わせて作られたもので、Oral ExamsやLab Drillsも含まれている。この様に、少なくともテキストについては独習用テープも用意するという心配り（それを学生がよく利用しているかどうかは別問題として）は、残念ながらまだ私たちには欠けている部分である。

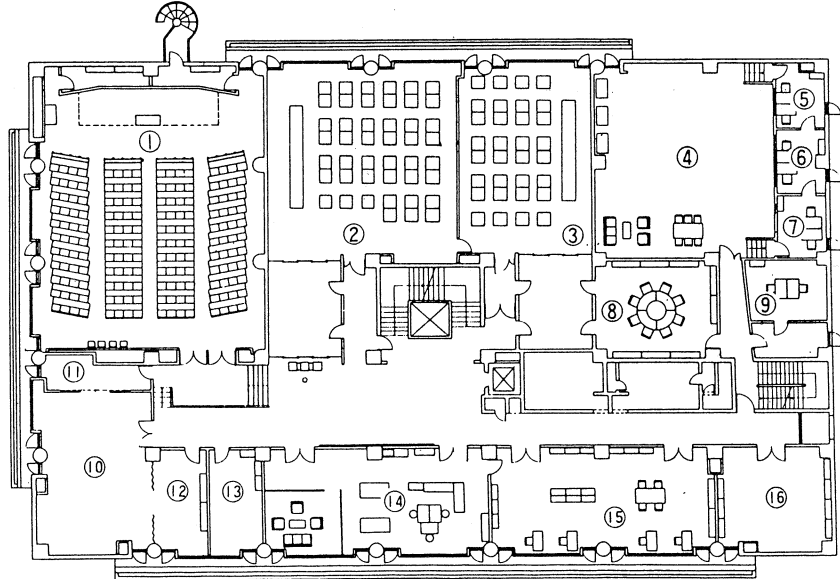
次に、スライドコレクションについては、中東34ヵ国計9,000枚を揃えており、授業にもしばしば利用される。加えて、日本では手に入れにくいイラン映画も、米西海岸のビデオ会社から買入れており、現在8本が図書館の視聴覚施設を利用して、常時見ることができる。イランのように気軽に旅行しにくい地域には、映画はまたとない教材となるので、これについては情報を集めているところである。

最後にペルシア語からは離れるが、DOALLの目玉商品に、コンピューターを利用したアラビア語教育がある。アラブ人教授が夫人と協力して長年かけて開発したシステムとのことで、学生はテキストの復習、ポキャブラリーの養成に、これを利用することが義務づけられている。これについても少し学んで、同じアラビア文字を用いるペルシア語教育にも、いつか応用できたらと考えている。

(1985年3月7日)

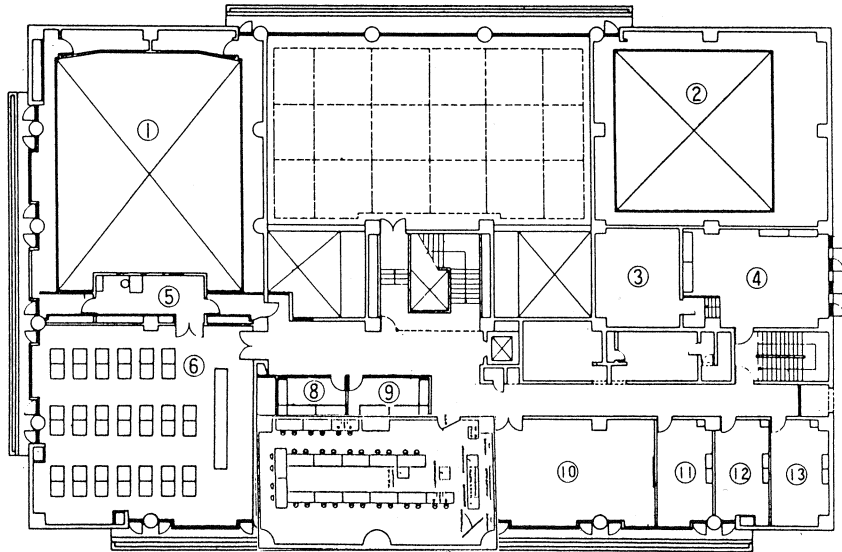
視聴覚教育施設平面図

4
階



- | | | |
|-------------|-----------|-------------|
| ①視聴覚教室 | ⑦企画室 | ⑬資料整理室 |
| ②4-I L.L教室 | ⑧ビデオルーム | ⑭事務室 |
| ③4-II L.L教室 | ⑨録音室 | ⑮テーブルライブラリー |
| ④スタジオ | ⑩デジションルーム | ⑯コンピューター室 |
| ⑤編集室 | ⑪同時通訳室 | |
| ⑥調整室 | ⑫モニター・資料室 | |

5
階



- | | | |
|----------|-------------|------------|
| ①視聴覚教室吹抜 | ⑥5-I L.L教室 | ⑪教材作成室 I |
| ②スタジオ吹抜 | ⑦5-II L.L教室 | ⑫教材作成室 II |
| ③無響室 | ⑧海外放送受信室 | ⑬教材作成室 III |
| ④音声実験室 | ⑨準備室 | |
| ⑤モニター室 | ⑩L.L自習室 | |

施 設 の 概 要

階数	室 名	数 量	面 積	設 備 名	使 用 目 的
4	L.L.教室 (1)	45ブース	132.5m ²	各ブースカラーテレビ付 教材提示装置、マイコンアナ ライザー、全リモコンマス ターコンソール	各語学科L.L. 授業で使用
	L.L.教室 (2)	32ブース	100.5m ²	各ブースカラーテレビ付 教材提示装置、リスポン ス・アナライザー、全リモ コンマスターコンソール	各語学科L.L. 授業で使用
	視聴覚教室	176席	233 m ²	電動スグリーン・カーテン、リ モコン、マイク、大型スピー カー、会議ユニット、送信機、受信機	視聴覚授業、学会、映画会、コン サート等に使用
	デジションルーム	21席	62.5m ²	会議ユニット、送信機、受信機	小国際会議場として使用
	同時通訳室	5席	12m ²	同時通訳ユニット、録音装置	同時通訳演練のため英語学科授業 他研究会に使用
	テープライブラ リー室	24席	77.5m ²	所蔵テープ、レコード16,000点 (教材自動送出装置 4席 リスニングブース 4席 L.L.自習ブース 16席)	学生の自習用のため使用
	録音室(アナウン スルーム・制御室)		28m ²	円盤再生機、高性能録音機、 マイクミキサー	Native Speakerの録音のため使用
	スタジオ		121m ²	ビデオ撮影機、編集機、テレ シネ装置、照明装置	独自教材の開発、映像音声、収録 のため使用
	企 画 室		11.5m ²		
	調 整 室		12m ²		
	編 集 室		11.5m ²		
	ビデオルーム	8席 (補助7席)	39m ²	ビデオコーダー、テレビ (Umatic, VHS, β型)	独自教材及びビデオ教材の映写 室
	コンピューター室		39m ²		
	事 務 室		77.5m ²	各ブースカラーテレビ付 教材提示装置、マイコンアナ ライザー、全リモコンマス ターコンソール	各語学科L.L.授業及び視聴覚授業 で使用
資 料 整 理 室		19.5m ²			
モ ニ タ ー 室		19.5m ²			
		19.5m ²			
5	L.L.教室 (3)	44ブース	155.5m ²	各ブースカラーテレビ、ビデオコ ーダー付(VHS・Be型)、教材提示装置、マイコンアナライザー、全リモコンマス ターコンソール、70型ビデオプロジェクター、OHPスライド、リモコン付移動 式レクチャーテーブル、教材送り出し用ビデオコーダー(Umatic, Be, VHS)	各語科L.L.授業で使用
	L.L.教室 (4)	32ブース	77.5m ²		
	L.L. 自 習 室	17席 (25名)	58m ²	ビデオコーダー、カセットコ ーダー	録音ビデオ教材の貸出によって学 生が自習する室
	映写モニター室		20m ²	オーディオ装置、マイクミキサー	
	音声実験室		48.5m ²	サウンドスペクトログラフ、 ビジビッチ、オシロスコープ 他各種音声分析装置	言語の性質を解明するためまざり ものない音声を収録、分析する ため使用
	無 響 室		29m ²		
	教材作成室	3室	58.5m ²	テープレコーダー、カセットコ ーダー、パソコン、個別学習装置	教材の編集(音声)のために使用
	海外放送受信室		11m ²	受信機、テープレコーダー	海外放送を受信、録音
準 備 室		11m ²			

テープ・ライブラリー、LLL自習室利用状況統計表

①テープ利用回数 '84.4月～'85.2月

(言語・音楽)

分類(各テープ総数)	総利用回数	1 (各利用回数)	2 (各利用回数)	3 (各利用回数)	4 (各利用回数)	5 (各利用回数)
1 英語(1394)	1383	The New Intensive Course in English Intermediate (84)	Linguaphone American English Intermediate Course (82)	英検一級 カセットブック (69)	Spoken Amrican English (69)	Linguaphone American English Advanced Course (31)
2 フランス語(784)	1263	Basic Spoken French Beginner's Course (631)	Basic Spoken French Elementary Course (189)	フランススのラジオ放送 (120)	Intensive Spoken French (87)	La France en Direct 2 (28)
3 日本語(137)	578	Japanese For Today (366)	Introduction to Modern Japanese (55)	桂米朝上方落語 (38)	Japanese for Beginners (35)	Intensive Course in Japanese Elementary (25)
4 ドイツ語(608)	333	Basic Spoken German I (62)	Deutsch 2000 II (51)	Deutsch 2000 I (47)	Lingsaphone Deutscher Kursus (29)	Basic Spoken German (10)
5 スペイン語(479)	252	Modern Spanish Third Edition (63)	Curso de español (59)	Espagnol en Direct (39)	Basic Spoken Spanish Part I (26)	Modern Spanish Second Edition (16)
6 ロシア語(612)	221	Говорим по-русски (172)	Учебник русского языка (92)	百万人のロシア語 (42)	ロシア語入門 (19)	発音教程 (10)
7 中国語(712)	169	中文教程 (39)	基礎汉语 (20)	LLL中国語 上級 (10)	基礎中国語 (7)	NHK中国語入門 発音・基本文型 (7)
8 イタリア語(167)	112	Lingua e Vita d'Italia (44)	ヴェルデイ「トロヴァトーレ」 (9)	イタリア語入門 (7)	Vacanze in Italia (5)	現代イタリア語入門 (5)
9 音楽編(352)	116	ベルー：アンデス高原の神秘的笛 (4)	キューバ：カリブの海辺の情熱のリズム (3)	トルコ：神秘的の国の民族をたずねて (3)	ジャワのガムラン音楽 (3)	トルコの音楽 (3)
10 アラビア語(115)	89	Elementary Modern Standard Arabic (50)	アラビア語入門 (11)	Spoken Saudi Arabic (4)		
11 デンマーク語(79)	72	Andersen Eventyr (50)	Lær at Tale Dansk (11)	Lyt & Lær Dansk Øvelse (5)	デンマーク語入門 (5)	
12 ポルトガル語 ブラジル語	65	Linguaphone Português Contemporâneo (42)	Linguaphone Course de Português (8)	A B Cからの ブラジル語会話 (4)	ポルトガル語入門 (4)	
13 西洋諸語(204)	61	スウェーデン語入門 (13)	Linguaphone Norsk Kurs (9)	Aaltio Finnish for Foreigner (8)	ASSIMIL Nederland Zonder Moeite (6)	Linguaphone Cursus Netherlands (5)
14 東洋諸語(55)	50	Turkish Basic Course (11)	トルコ語教本 (7)	Linguaphone Hebrew Course (5)		

(言語・音楽)

分類(各テーマ総数)	総利用回数	1 (各利用回数)	2 (各利用回数)	3 (各利用回数)	4 (各利用回数)	5 (各利用回数)
ペルシア語 (174)	38	Iranian Music (9)	ペルシア語入門 (5)	基礎ペルシア語 (4)		
タイ語 (27)	38	実用タイ語会話 (18)	標準タイ語教本 (14)	タイ語入門 (6)		
インドネシア語 (52)	37	Kursus Bahasa Indonesia Pegantar (8)	Di Indonesia (6)	Round-The-World Indonesian (5)		
ウルドゥー語 (73)	27	Spoken Urdu (13)	Nayyara Sings Faiz (2)			
ベトナム語 (41)	14	FSI Basic Course Vietnamese (6)	Spoken Vietnamese (5)			
朝鮮語 (55)	12	標準韓国語 (4)	朝鮮語の基礎 (3)			
ビルマ語 (23)	11	現代ビルマ語入門 (9)	ビルマ語会話 (2)			
モンゴル語 (15)	10	モンゴルの音楽 (3)	モンゴル語4週間 (2)			
ヒンディー語 (37)	10	Linguaphone Hindi Course (6)	Message to the Students (2)			

(Video)

1 英語 (121)	1574	炎のランナー (62)	ローマの休日 (57)	マイ・フェア・レディ (50)	Billy Joel Newyork Live (50)	ゴッド・ファーザー (42)
2 フランス語 (26)	188	ラ・ブーム (30)	太陽がいっぱい (23)	男と女 (23)	ザ・カンニング (18)	Mr.レディ M.マダム (13)
3 中国語 (41)	50	ふたごの兄弟 (6)	苦恋 (6)	人到中卒 (6)	阿Q正伝 (4)	未完の対局 (4)
4 ヒンディー語 (42)	25	SATYAM SHIVAM SUNDARAM (6)	ANAND (5)	Roti Kapada aur MAKAAAN (4)	ANAND ASHRAM (4)	OURBANI (3)
5 ロシア語 (23)	23	検察官 (7)	決闘 (7)	レニングラード物語 (3)	オプローモフの生涯より (2)	ある馬の物語 (1)

(Vidéo)

分類(各テープ総数)	総利用回数	1 (各利用回数)	2 (各利用回数)	3 (各利用回数)	4 (各利用回数)	5 (各利用回数)
6 イタリア語 (10)	20	甘い生活 (8)	青い体験 (7)	道 (3)	ベニスの商人 (2)	コルレオーネ (1)
7 日本語 (28)	11	東京大空襲 (2)	日本留学と私の夢 (2)	コンピューターからみた日本語 (2)	坊ちゃん (1)	キタキツネ物語 (1)
8 ドイツ語 (3)	10	Uボート (9)	鉄道に消えた女 (1)			
9 アジア (25)	8	戦時下のイラン革命 (2)	敦煌 (1)	幻の黒水城 (1)	流砂の道 (1)	特集パレスチナ (1)
10 ヒルマ語 (8)	4	ヒルマの伝統舞踊 (2)	ヒルマの伝統芸能 (1)	ヒルマの灯祭り (1)		
11 朝鮮語 (18)	3	土地 (2)	朝鮮の伝統料理・住まい (1)			
12 アフリカ (5)	3	アバルトヘイト (2)	南アフリカ解放への道 (1)			
13 ポーランド語 (1)	2	灰とダイヤモンド (2)				
14 モンゴル語 (3)	2	大草原のまつり (1)	大草原の牧畜民 (1)			
15 インドネシア語 (1)	1	熱帯のスマトラ (1)				

(雑誌)

1 English Journal(102)	144	'84別冊No.5 ヒアリングカクアアップ! 映画聞き取り大作戦 (19)	'84No.11 教えます!上手な自己紹介 (14)	'84No.9 英語で自由自在に質問する ためのテクニク (12)	'84No.10 単語を分解! 幅広く広用 のきくボキヤピル (12)	'81No.8 エンターテイメントにこそ、 アメリカがある (11)
2 Business View (48)	61	'83別冊 「鉄」の読得力 サッチャーを聞く (10)	'84No.9 国際化ニッポンの 期待と現実 (8)	'84No.6 ニューメディアの 現場から (6)	'84No.7 カリフォルニア・ フォーカス (6)	'84No.3 男と女 オフィス模様 (5)
3 時事英語研究 (51)	56	'84No.5 <英語のエキスバ ートになるための> 特集辞典30冊 (7)	'81No.1 英語の資格試験 (6)	'84No.10 「公開」私の情報 ソースとその料理法 (6)	'84No.6 「映画の名セリフ」集 (1938-1984) (4)	'84No.7 <14人のプロカ明かす> 翻訳うらばなし (4)
4 FEN (6)	6					

②テープ利用率 '84.4月～'85.2月

(言語・音楽)

順位	語科名	利用率
1	英語	27.9%
2	フランス語	25.5%
3	日本語	17.7%
4	ドイツ語	6.7%
5	スペイン語	5.1%
6	ロシア語	4.5%
7	中国語	3.4%
8	音楽編	2.3%
9	イタリア語	2.3%
10	アラビア語	1.8%
11	デンマーク語	1.5%
12	ポルトガル・ブラジル語	1.3%
13	西洋諸語	1.2%
14	東洋諸語	1.0%
15	ペルシア語	0.8%
16	タイ語	0.8%
17	インドネシア語	0.8%
18	ウルドゥー語	0.5%
19	ベトナム語	0.3%
20	朝鮮語	0.2%
21	ビルマ語	0.2%
22	モンゴル語	0.2%
23	ヒンディー語	0.2%

(雑誌)

順位	雑誌名	利用指数
1	English Journal	53.9
2	Business View	22.8
3	時事英語研究	21.0
4	F E N	2.2

(Vidéo)

順位	語科名	利用率
1	英語	81.8%
2	フランス語	9.8%
3	中国語	2.6%
4	ヒンディー語	1.3%
5	ロシア語	1.2%
6	イタリア語	1.0%
7	日本語	0.6%
8	ドイツ語	0.5%
9	アジア	0.4%
10	ビルマ語	0.2%
11	朝鮮語	0.2%
12	アフリカ	0.2%
13	ポーランド語	0.1%
14	モンゴル語	0.1%
15	インドネシア語	0.1%

編集後記

- ⊕ AVジャーナル第7号をお届けします。外国人教師による外国語教育座談会の記事を集めました。有意義な座談会だったと思われますので、今後も開催していく予定です。
- ⊕ 1984年4月から1985年2月まで1年間のテープライブラリーの利用者統計も掲載していますが、留学生の利用比率は非常に高く、又、ビデオテープの利用が年々増加しています。
- ⊕ しかし、現状は、ビデオ・ルームは授業で使用していますし、自習室にはビデオ装置は2台しか

なく、いつも利用者に不便をかけていましたが、今年度中に3階にビデオ自習室(18ブース24名以上)の設置が決まり、来年度から利用出来ることになり、それもやっと解消出来ると思います。

- ⊕ 今年度の語劇ビデオ撮影は、英語・フランス語・ドイツ語・モンゴル語・ペルシア語学科とシェクスピアを上演する会等でした。
- ⊕ 今年卒業される原由起子(大学院)、志岐典子、亀井克之、根岸朗子各氏には長い間LLの仕事を手伝って頂きました。(H.K.)

AV Journal 一第7号一

1985年3月28日発行

編集 大阪外国語大学視聴覚教育委員会
 附属図書館視聴覚資料係
 発行 大阪外国語大学
 印刷 (株) ムラタ印刷